



王太子妃殿下の  
離宮改造計画 2

---

斎木リコ  
*Riko Saiki*

RB

レジーナ文庫

## 登場人物 紹介

### ハルハーゲン

スィーオネースの  
王族でもある公爵。  
何か思惑があるのか、  
杏奈に妙に  
つきまとって……？

### クロジンデ

杏奈の親戚の  
お姉さんで、  
外交官の夫を持つ  
伯爵夫人。  
杏奈の社交を  
サポートして  
くれる。

### エンゲルブレクト

王太子妃護衛隊の隊長。  
伯爵位を持つ貴族でもある。  
杏奈の護衛を通じて、彼女と  
少しずつ親しくなってきた。

### フィリップ

リリーの助手。彼女や  
イエシカに振り回される  
苦勞人。

### リリー

杏奈の侍女。  
優秀な魔導の  
研究者でもある。  
美人だが  
とんでもない  
変人。

### あんな 杏奈(アンネゲルト)

日本育ちだが、ある事情で  
異世界の王太子妃となった。  
現在は夫と別居し、離宮の  
改造計画に精を出している。

### イエシカ

離宮改造計画  
を請け負った、  
スィーオネースの  
女性建築家。

### ティルラ

杏奈の侍女。  
非常に有能な女性で、  
杏奈の心の支えと  
なっている。

### ルードヴィグ

スィーオネースの王太子。  
杏奈の夫だが政略結婚相手の  
彼女を疎み、離宮に追放した。  
そのせいで謹慎を受けている。

## 目次

王太子妃殿下の離宮改造計画 2

7

書き下ろし番外編

妃殿下の焼き菓子

367

王太子妃殿下の離宮改造計画 2

## 一 ピクニックへ行こう

北国スイーオネースの夏は短いが、彩り豊かだ。短い季節を謳歌するように、様々な花が咲き誇る。それはここ、カールシュティン島も同様だった。

その花の絨毯が見事な野原を、スイーオネースの王太子妃、アンネゲルト・リーゼロッテがゆつくりと歩いている。黒い髪に榛色の瞳の彼女は、長い髪を風になびかせながら野原を進んでいた。

彼女の周囲は、武装した無骨な男達が囲っている。彼らは王太子妃護衛隊の面々で、一定の緊張感を持って周囲を警戒していた。

「手入れをされた庭園も綺麗だけど、こういう人の手の入っていない野原も綺麗だと思うわ」

アンネゲルトは目の前に広がる景色を眺めながら、そんな感想を漏らした。

——こんなに穏やかな時間を、この島で送る事になるなんてねー。

アンネゲルトは、この国に来るまでの経緯を思い出して遠い目をする。

彼女は少々複雑な血筋を持っていた。ここから南へ船で数週間の距離にある、大国ノルトマルク帝国皇帝の弟である公爵が父で、遙か異世界の日本の庶民が母。つい数ヶ月前までは、母と日本で生活していた。

アンネゲルトがこの国に来る事になったのは、母である奈々との賭けが原因だ。就活で一つでも内定を取ればアンネゲルトの勝ち、一つも取れなければ奈々の勝ち。勝てば好条件で日本で暮らせたが、負ければ母と共に父の国に帰るというものだ。無論、日本には二度と帰れない。

——その結果、帝国に戻ったはいいけど、まさか縁談まで用意されていたなんて。

アンネゲルトを待っていたのは、伯父である皇帝からの「スイーオネース王太子に嫁げ」という命令である。反発はしたものの、国同士で決めた政略結婚を個人の感情でひっくり返す事は出来なかった。

納得出来なくても最終的に受け入れたのは、結婚を長続きさせなくてもいいという確約をもらった為だ。政略結婚なのにそれでいいのかと思うが、伯父が言うのだからいいのだろう。

そうしてスイーオネースに嫁いだアンネゲルトだが、王太子妃という身分にある彼女

が暮らしている場所は、王宮ではない。王都から内海を挟んだ向かい側にある小島、カールシュティン島である。

何故かといえば、彼女の夫である王太子ルドヴィグが婚礼の祝賀舞踏会で別居を申し渡したからだ。別居先に指定されたのがここ、カールシュティン島にあるヒュランダル離宮なのだ。

野原を歩くアンネゲルトが振り返ると、遠くに離宮が見えた。長く放置されていたらしく荒れ果てていて、人が住める状態ではない。ルドヴィグはこの状態を知っていて、アンネゲルトをここに送ったのだろう。住めない離宮を前に、右往左往するつもりも思っていたのかもしれない。

——本っ当に腹立たしい！ 見てくれは綺麗だけど、中身は最悪よね、あの王太子って。だが、彼のもくろみはすぐに崩れ去った。アンネゲルトが帝国から乗ってきた船は魔導技術の粋を集めたもので、ホテルシップとして使用する事が出来たのだ。設備の充実ぶりを考えれば、スイーオネースの王宮に住むよりずっと快適だった。

とはいえ、国王からも離宮を修繕しゅうぜんして構わないと許可をもらっているのだから、好き勝手に改造する事が決まっている。離宮の改造という目的が定まったおかげか、アンネゲルトは以前ほど、帝国——というより日本へ帰りたいと思っていない。変われば変わる

ものだ。

そんな彼女は、今日はピクニックに来ている。

島の北側は、地形の関係か船着き場が作られず、また離宮からも離れているせいで手つかずのままになっていた。

野原の先の海に向こうには、本島の陸地と山並みが広がっている。カールシュティン島は、大きくコの字を描く内海に浮かんだ島なのだ。

雄大な景色は見ているだけで癒やされる。アンネゲルトが育ったのはビルに囲まれた場所で、こういった自然にはそれほど縁がなかったから、余計にそう感じるのかもしれない。

「妃殿下、あまり護衛から離れないでください」

そう注意してきたのは、王太子妃護衛隊の隊長を務めるサムエルソン伯エンゲルブレクトである。今日のピクニックでも、彼は護衛隊長として職務に励んでいた。

ほんの少し前に、この島に入り込んだ侵入者にアンネゲルトが襲撃されるという事件があった。彼はその際、彼女の窮地を救った経緯がある。事件はアンネゲルトと正式な目通りをする直前の事だ。それまで、護衛隊は出番がなく暇を持て余していた。

最近は彼らにも活躍の場が与えられている。アンネゲルトが建築士のイェシカと正式

契約し、離宮の改造へ動き出したのと同時に、積極的にカールシュティン島を見て回るようになった為だ。

アンネゲルトの側仕えで帝国出身のティルラも、これを歓迎してくれた。

『外に出ないのは不健康ですからね。それに、あまりあれこれ禁止すると、何をやらかすかわかりませんから。勝手に下船されるくらいでしたら、しつかりと護衛を連れていただく方が助かります』

随分な言われようだったが、船の外に出られるのだからと文句は呑み込んだ。そのティルラは、今もアンネゲルトのすぐ側そばにいた。

ティルラは、三人の側仕えの中で唯一今回のピクニックに同行している。

二人目の側仕えであるリリーは魔導研究に余念がなく、かつ離宮改造計画に深く関わっている為、同行していない。しかもイェシカから毎日質問攻めにあっているようで、嬉々として彼女にあれこれ語っているらしい。

三人目の側仕えのザンドラは、彼女の方が海に落ちかねないので同行させなかった。

何しろ、彼女は常に眠たげでなんとなく心配なのだ。今頃は船の私室でゆっくり寝ているだろうか。

「わかりづらいですが、野原の先は小さい崖になっております。あまり近づかれませ

ように」

エンゲルブレクトからの忠告に先の方を見れば、護衛隊員が等間隔に並んでいる。あの辺りが崖になっているようだ。

この辺りは、例の襲撃事件の後に護衛隊員がくまなく調べたのだとか。周囲の全てがアンネゲルトの安全の為に動いていた。

アンネゲルトはその仰々おごごしさに溜息を吐きたくなったが、何とか呑み込む。本当なら、今日のような軽装は許されないので。その点を見逃してくれているだけでも、感謝するべきだろう。もつとも、ただ見慣れただけなのかもしれないが。

視察時のアンネゲルトの服装はまちまちだが、基本的には日本にいた時と同じような格好をしている。今日はマキシ丈のワンピースにレースのボレロを合わせ、足下はスニーカーだ。

彼女の服装を最初に見た時の護衛隊の反応は見物みものだった。ぎょつとした後にほぼ全員が目を逸らすのだ。彼らにしてみれば、これほど軽装の貴婦人を見た事がない為、仕方ないのだろう。

しかし、それも最近は少なくなった。おそらく一度同行した隊員から話が広まったのだ。アンネゲルトの服装に関しては、何も楽だから日本の物を使用している訳ではない。

襲撃事件の経験から、実用性も考えての事だ。

あの時、軽装でなくドレスだったら、助かっただけじゃなかったかもしれない。万一を考えれば、少しでも動きやすい方がいい。

アンネゲルトのその意見は、ティルラや護衛船団のエーレ団長にも受け入れられた。

護衛隊には、最初の視察兼ピクニックの際にティルラから注意事項として一言言っている。

『妃殿下は故国での装いを好まれます。こちらのものとは大分違います。それについては驚かれませんが』

それでも、軽装の貴婦人に不慣れな彼らの事を考えて、なるべく露出の少ないものを着用していた。

——日本で着ていたコーデだと、はしたないと思われるんだろうな……

好んで肌を出す服を着ていたつもりはないが、こればかりは感覚の差だ。今着ているワンピースだって、どうかすればこちらの下着程度である。

「それにしても、どうしてこんな何もないところを視察しようと思われたんですか？」

ふいに、エンゲルブレクトが不思議そうにアンネゲルトに聞いた。狩猟用の森や庭園ならばともかく、ここは視察する意味がないと考えたのだろう。

「あら、言わなかったかしら？ 離宮の改造を始めたでしょう？ ついでに島のあちこちにも手を入れようかと思ってるの。その為よ」

にこやかに返答するアンネゲルトに、エンゲルブレクトは首を傾げている。

離宮が建造された当初も、この野原に何かを建てる計画は出なかったそうだ。狩猟用の森からも遠く、手を入れる必要性をあまり感じさせないからだろうか。

アンネゲルトにも、ここを有効活用するしつかりしたアイデアがある訳ではない。こうして足を運ぶ事によって、何か思いつかないかと考えている程度だ。

そもそも、このピクニックには視察以外にもう一つ目的がある。むしろそちらがメインだった。だが、それをエンゲルブレクト達に悟られたくない。だからこそ、表面さの目的を強調するしかなかった。

「アンナ様、そろそろ昼食にしませんか？」

そう声をかけてきたのはティルラだ。確かにいい時間だった。

「そうね。今日はここでいただきますでしょう。天気の良い日でよかったですわ」

昼食は、船の厨房で特別に作ってもらったランチボックスだ。

メインダイニングを預かる料理長自ら作ったというランチボックスは豪華で、前菜に始まりスープ、魚料理、肉料理、デザートまでついていた。しかも、入れてきたバスケット



トは魔導器具であり、温かい物は温かいまま、冷たい物は冷たいままになっている。ランチボックスがこれだけ豪華になったのには訳があった。

当初、アンネゲルトはピクニックの定番として、サンドイッチと飲み物程度でいいと思っていたのだ。

だが、それを聞いた料理長が、自分が関わる以上手は抜かないと素材から厳選し、出先でも盛りつけに問題が出ない料理をこしらえたそう。

それを、同行した三人の小間使いが、持ってきた携行用の食器に盛りつけている。外だというのに随分と本格的な食事だった。

ランチボックスは馬車に積んでいたものを、護衛隊員が手分けして運んできている。小間使い達が運ぼうとしたところ、女性に重い物を持たせる訳にはいかないと申し出てくれたのだとか。

昼食は当然、彼らの分もある。ティルラ指導の下、護衛隊の中の数人が配膳をしていた。実は、これこそが一番の目的なのだ。護衛隊員に帝国製の食事を振る舞う事で、帝国への精神的な壁を低くしてもらい、魔導に対しても耐性をつけてもらおうというものがある。

発案者はアンネゲルトだ。

『食は文化だもの。帝国の文化に触れる事で理解を深めてほしいのよ。魔導に関してもね。そうでないと、彼らを船に入れる事が出来ないわ』

いつまでも護衛隊を狩猟館周辺で野宿させる訳にもいかないでしょ？ と続けた彼女に、ティルラとエーレ団長の表情は渋く、手放しでは賛成しかねるといった風だった。果たしてその程度の事で理解が深まるものかと思っただろう。

だが他に有効な手段を考えつかなかったせいで、結局アンネゲルトの「胃袋から掴め作戦」に同意せざるを得なかったという訳だ。

とはいえ、滑り出しは上々だった。最初のピクニックで昼食を出した時の、護衛隊員達の驚いた顔は忘れられない。後でエンゲルブレクトから聞いたところ、あれ以来「視察」の護衛に参加したがる隊員が多くて大変なのだそう。

魔導への悪感情も、今のところ見受けられない。ランチボックスをわざわざ魔導仕様にしたのは正解だったようだ。現在の彼らの魔導への認識は「おいしい食事を保つてくれているもの」であって、この国でよくいわれているような「得体の知れない恐ろしいもの」ではないらしい。どのような内容であれ役に立つ技術と認識してもらえればいい。

ここまででは、全てがうまくいっているようだ。これなら、近いうちに護衛隊を船に迎え入れる事が出来るだろう。



エンゲルブレクトは、和やかに進む昼食の仕度を少し離れた場所から眺めていた。

護衛隊の顔ぶれは毎回替えている。これは隊員達の希望でもあったが、何より王太子妃アンネゲルト側からの申し入れが原因だ。

『なるべく全員と顔を合わせておきたいの』

護衛してもらうのだからさせてそのくらいは、という事らしい。

エンゲルブレクトはふと、アンネゲルトと初めて会った状況を思い出した。王太子妃を出迎えるべく、帝国の玄関口と呼ばれる港街オッタースシュタットまで、使節団を組んで向かった時の事である。

彼は、到着して早々に体を伸ばしたいと思い、港街を散策して路地裏に迷い込んだ。

そこで酔っ払いに絡まれていた少女二人を助けた。そのうちの一人がアンネゲルトだったのだ。彼女は変装までしてお忍びで街に出ていたらしい。

それがわかったのは、カールシュテイン島に侵入者があった時だ。この際もエンゲルブレクトはアンネゲルトが追われているところに行き合わせ、彼女を救っている。もっ

とも、あの時は相手が王太子妃だとは知らなかったが。

国王からの要請で作った王太子妃護衛隊であるものの、あの襲撃事件まで当の王太子妃アンネゲルトには目通りが叶わなかった。おかげで、相手の顔を知らないまま助けるという間抜けな構図になった訳だ。

その後、正式に目通りをして、こうして護衛隊本来の仕事が出来るようになった。それは喜ばしいのだが……

「帝国の技術というのは、空恐ろしいものですね」

隣に立つ副官のヨーンがぼそりと呟いた。彼もエンゲルブレクト同様、最初の視察から同行しており、何度も不思議な昼食の場に居合わせている。

味が不思議という訳ではない。それどころか王宮の料理にも匹敵する出来映えだ。

不思議なのは、船から出て大分時間が経っているのに、さも今作りましたと言わんばかりに湯気を上げている事だ。

それだけではない。食後の甘味などは井戸の水でも冷やしていたのかと思うほど冷たく保たれている。それらが同じ箱から出てくるのが、この上なく不思議なのだ。

初めて見た日に、どうなっているのかとティルラに聞いてみたところ、あれは帝国の魔導技術を使った箱なのだと言われた。

話だけ聞けばそんなばかなと思うが、実際に目の前に出されている以上、否定は出来ない。第一、あの船の中を見てしまっただけは、何があってもおかしくはないと思う。

王太子妃アンネゲルトが帝国から乗ってきた船は、外側は普通の大型帆船だ。

しかし、一步中に入るとそこには別世界が広がっていた。比喻でも何でもなく、異世界にでも迷い込んだのかと思っただけだ。

あの時の衝撃を思い出しながら眺めている間にも、食事の仕度は着々と進んでいく。程なく、声がかかった。

「お支度、整いました」

この視察の間、昼食は外で食べている。自分達は軍での経験があるから問題ないが、アンネゲルトも皆と同じく外で昼食を取るのには、いささか驚いた。しかも地面に敷物を敷いて、その上に直に座るのだ。

エンゲルブレクトのみならず、護衛隊員は誰もが驚いたものの、帝国側の人間はそれが当たり前という様子だった。

ティルラにそれとなく尋ねたところ、こうして自然の中で飲食する事は、帝国の流行なのだそうだ。

『スイーオネースは冬の長い国ですから、奇異に映るかもしれませんがね』

彼女はそう言って、いつもの笑みを浮かべていた。確かに、この国で外を楽しめる時間は短い。実際そろそろ秋の気配が訪れる頃だった。

「それまでに終わるといいのだが……」

「何か仰って？」

うっかり内心を声に出していたようだ。不思議そうにこちらを見るアンネゲルトに、何でもありませんと答えて料理に手を伸ばす。少し離れた場所にいる部下から、感嘆の声が聞こえてきた。

「これが噂の……」

「う、うまい！」

「王宮でも、これほどの料理は出た事がないのでは!？」

思っても口には出さず、と言いたるところだが、アンネゲルトの前だ。彼らを叱責する訳にはいかない。

「皆さんの口にあったようでよかったわ」

隊員達の声がアンネゲルトにも聞こえたらしい。そう言って笑う姿は屈託がない。気分を害していないのなら何よりだ。

「この島内視察の仕事は、隊員の中でも人気なんです。特にこの昼食が」

「本当に？ 嬉しいわ」  
 そう言って花が咲いたように微笑む彼女の姿は、エンゲルブレクトには少し眩しいものだった。



帰りの馬車の中で、アンネゲルトはティルラ相手にはしゃいだ声を出した。

「いい感じに動いてるわよね!？」

「そうですね。どの隊員も好感触でした」

「この分なら、予定より早く皆を船に収容出来るんじゃないかしら？」

そろそろ、視察に同行する護衛隊員が一巡する。帝国の料理を口にしていない者は少ないのではないだろうか。

樂觀的なアンネゲルトの意見に、ティルラは苦言を呈する。

「アンナ様、彼らは戦闘のプロです。そんな彼らが船内のあれこれに過剰反応して暴れたりしたら、制圧するのに手間がかかります。それは彼らの為にもなりません。今はまだ料理程度ですから問題も出てきませんが、船の中はこの国にない物ばかりなんですか

らね。ちよつとやそつとでは許可は出せませんよ」

エレベーターや自動ドア、シャワーに水洗トイレも、彼らにとつては未知の物なのだ。「そうよね、私だっていきなり未開の部族の村とかに行ったら、カルチャーショックを受けそうだし」

「行った事があるんですか？」

「ないけど、そういう事なんだろうなって事！ 想像よ、想像」

くすくすと笑うティルラに、わかっていて言っているかと気付く。アンネゲルトが日本から出た事がないのは、彼女も知っている。

日本国籍を持つアンネゲルトは、取ろうと思えばパスポートを取得出来たのだが、奈々が許さなかったのだ。おかげで高校の時の修学旅行では海外コースを選択出来なかった。あの時は盛大な親子喧嘩をしたものだ。

嫌な事を思い出したと顔をしかめるアンネゲルトに、ティルラは島の地図を広げながら進捗を報告する。

「これで島の全てを見て回ったんじゃないでしょうか」

「本当に？ ……この、西側の端は？」

アンネゲルトはティルラの持っている地図を見て、赤ペンで印のついていない箇所を

指した。

「道が途切れているんです。狩猟館やら離宮を作った時も、こちらに行く用事はないと思われたようですね。行くとなると道なき道を行く事になりますが、よろしいですか？」  
「う……」

これまで回った場所は、馬車で行けたところばかりだ。道がないとなると、馬か徒歩になってしまう。アンネゲルトは乗馬が得意ではない。普通の道ならいざ知らず、悪路となると尻込みするというものだ。

「真の目的も果たした頃ですし、この辺りで視察という名のピクニックは一旦終えてはいかがですか？」

「そ……そうね……西側は何もないって事で、忘れましょう」

元々この視察は、護衛隊員に帝国の料理を食べさせる名目として考えたものだった。当初の目的は概ね果たされたと思っ**おぼ**ていい。

だがその後、もう一回だけ視察へ行く事になった。

「狩猟館？」

船に戻りティルラから聞かされた話には、アンネゲルトが意外そうな声を上げる。

「ええ。視察はもう終わりにすると護衛隊の方へ言いましたら、最後に狩猟館をご覧になりませんか、とサムエルソン伯から」

「隊長さんが……」

アンネゲルトはエンゲルブレクトを「隊長さん」と呼んでいた。本来ならティルラと同様に「サムエルソン伯」と呼ぶべきだが、船の中だけでの呼称なので誰かに聞かすとがめられる事もない。

「いかがなさいますか？」

「そうね、行きましょうか。隊員全員分のお昼を持って、ね」

だめ押しも含めて、うんとおいしい物を持っていこう。アンネゲルトは船の外に広がる景色を眺めながら、護衛隊員達の喜ぶ姿を思い浮かべていた。

最後の視察の日は、すぐに訪れた。話題が出た日から、わずか三日後である。

「早いね」

「島の中ですし、行く場所が護衛隊の本拠地ですからね。これが島の外となったら、準備にもっと時間がかかりましたけど」

自室で予定を聞かされたアンネゲルトの眩くらきに、ティルラはそう答えた。

身分上、訪問相手の都合やら護衛の為の計画などがどうしても必要になる。なので、本来はほんの少し外出するだけでも、準備に時間がかかるものなのだそうだ。

今回、諸々の手続きを省く事が出来たのは、一度襲撃を受けた為、島内の警備を見直した事が大きい。あの事件の後、リリーは助手のフィリップと共に、不眠不休で警備システムを構築したと聞いている。

船から出た馬車は、ゆっくりと離宮を回って狩猟の森の入り口に建つ館へ向かう。今回は全隊員分の昼食を運んでいるので、馬車は全部で四台だ。

狩猟館の前で、隊員達が並んで出迎えてくれた。停まった馬車の扉を開いたのは、隊長のエンゲルブレクトだ。

「足下にお気を付けてください」

「ええ、ありがとう」

彼に手を取られて、アンネゲルトはどきどししながら馬車から降りる。こんな風に手を取られる事は、助けてもらった時以来ではないだろうか。普段、こうした役目は側仕えのティルラのものである。

「ご足労いただき感謝の念に堪えません。むさ苦しい場所ですが、どうぞ心ゆくまでご覧になってください」

エンゲルブレクトの謙遜にそんな、と言いかけたが、確かに男性ばかりの集団がいる場所だ。一体どうなっている事やらと思つくと、アンネゲルトの笑顔がほんの少し引きつる。「妃殿下はこちらの館には不慣れです。誰か案内役を願えますか？」

脇からそう声をかけたのはティルラだ。おかげで、アンネゲルトの引きつった笑顔には誰も気付かなかつたらしい。本当に有能な側仕えだ。

隊員の一人が案内役に立ち、アンネゲルト、ティルラの後ろからエンゲルブレクトとヨーンが同行する。小間使い達は馬車で待機だ。

「とても綺麗な建物なのね」

狩猟館に立ち入ったアンネゲルトはそんな言葉を漏らした。狩猟用の館というから、もつと無骨なものを想像していたのだが、外観も内装も優美さに溢れている。

「王族の狩猟用に建てられたものだからでしょうか。趣味のいい建築だと思います」

エンゲルブレクトの言葉に頷きながら、アンネゲルトはあちこちを見て回る。柱の一つ、梁の一つにも細やかな彫刻や飾りが施してあり、派手さはないが趣味のいい館だ。

「ここ、イエシカにも見せてあげられないかしら」

それはほんの思い付きだった。離宮と同年代に建てられたのかどうかはわからないが、改造のヒントくらいは拾えるかもしれない。

「イエシカ？ 確か、離宮の修繕しゅうぜんを請け負う建築家でしたか？」

「ええ、そうなの。この館は彼女が喜びそうだわ。ここで得られるものがあれば、離宮の改造にも反映してくれるでしょう」

建築には貪欲どんごくな彼女の事だ。この館のそこかしこにある装飾類には、きっと夢中になる事だろう。

アンネゲルトの言葉に、エンゲルブレクトはそういう事なら、と頷く。

「前もって報しらせてもらえれば、いつでも来てもらって構まいません」

「本ま当ごに？」

「ええ。この狩猟館は離宮の付属物のようなものですから、ある意味、ここも妃殿下のものと言えます」

てつきり護衛隊の本拠地だから無理だと断られるとばかり思っていた。あつさり許可が出た事が嬉しくて、アンネゲルトはついいつもの調子で口にしてしまう。

「ありがとう！ 隊長さん！」

「……『隊長さん』？」

「あ」

気付いた時には遅かった。アンネゲルトの頬が徐々に赤く染まっていく。今日は軽装



の為、ドレスの時には必ず持つ扇おうちぎを持っていない。思わず両手で口元を覆った彼女の周囲は、あまりの事に固まったままだ。

最初に口を開いたのは、エンゲルブレクトだった。

「妃殿下は私の部下ではないのですから、その呼称はいかがなものかと……」

困惑気味にそう言われたが、何故か引く気になれない。アンネゲルトにしては珍しい事だ。

「だ、ダメかしら!? その、公おみやぎの場ではなるべく控えるようにするから……」

段々と声が小さくなった。言いながら俯うつむいてしまったのは、いたたまれなかったからだ。自分は一体何を言っているのか。目の前にいるエンゲルブレクトも、きつと困っている。

第一、自分の立場で言うべき事ではない。アンネゲルトは俯うつむいたまま、先程の言葉を撤回するべく口を開いた。

「あの……やっぱいい——」

「妃殿下がよろしいのであれば、私の方は構いませんよ」

「……え？」

顔を上げると、苦笑しているエンゲルブレクトが見える。怒っていないようだし、迷

惑という風でもない。本当に、いいのだろうか。

「呼ばれ方など様々あるものです。むしろ、親しみを込めてそう呼んでいただけののなら、私に否はありません」

エンゲルブレクトの言葉に、先程まで落ち込んでいた気分が一気に浮上した。自分でも現金だと思いが、人の気分などそんなものだ。

「ありがとうございます！ 隊長さん！」

アンネゲルトの満面の笑みに、エンゲルブレクトも笑い返してくれる。

しばし二人で見つめ合っていると、脇からティルラの声がかかった。

「アンナ様、そろそろ昼食にしませんか？」

その言葉に、何人かが懐中時計を確認している。いつの間にかそんな時間になっていたらしい。何故かアンネゲルトの視界の端には、あからさまにほっとしている隊員の姿が映った。

ティルラは、エンゲルブレクトに向き直ってきびきびと問いかける。

「伯爵、狩猟館の中には食堂がありますか？」

エンゲルブレクトは、ばつが悪い様子で答えた。

「あ、ああ。案内させよう」



「本日は全隊員の分の昼食を持参しております。食堂に全員分の余裕がないようでしたら、一部の方々には外で召し上がっていただいてもよろしいでしょうか？」

「問題ない。軍隊ではよくある事だ」

「では、そのように仕度させます」

ティルラはそう言うと、後ろに控えていた小間使いに小声で何かを指示する。仕度にかかるように言ったのだろう。

アンネゲルトは先程の機嫌のよさのまま、ティルラに促されて浮かれた様子で食堂へ向かった。

狩猟館の食堂は広く、趣のある場所だ。等間隔に並ぶ質素な柱すら、計算された配置に見える。

長いテーブルの中央に腰を下ろしたアンネゲルトの正面に、エンゲルブレクトが座った。

ざわつく食堂内では、小間使い達と共に何人かの隊員が忙しそうに立ち働いている。今日の献立は前菜の盛り合わせに魚、メインの肉、パンと小さめのポウルで出されるスープ、デザートだ。

食事中は、主にティルラとヨーンが王都の事や狩猟館での不都合などを話していた。

それと同時にあちらこちらのテーブルから楽しそうな声と料理を褒める言葉が聞こえ、アンネゲルトは笑みを深める。

作戦はうまくいっているようだ。このまま彼らの胃袋を掴み続けければ、遠からず全員を船に収容出来るだろう。だが、その前にもう一押ししておきたい。

「そろそろ次の段階かなー」

気が抜けたせい、アンネゲルトが無意識に呟いた言葉は日本語だった。隣に座るティルラが軽く肘で小突いてきたが、気付いた時には遅かった。

「妃殿下、今何と仰ったんですか？」

「え？」

前に座るエンゲルブレクトが、きらりと光る目でこちらを見ている。それはさながら、獲物を見つけた猛禽類のごとき目だ。先程の穏やかな笑顔とは違い、鋭い笑みを浮かべている。

はて、自分は何か変な事をしただろうか。アンネゲルトはしばらく首を傾げた後で、日本語を使ったのは十分変だったかもしれないと思いつつた。

アンネゲルトは、母とティルラと、公の場で日本語を使わないと約束している。ここが公の場と言えるかどうかは置いておいて、使ってしまった事に違いはない。

「妃殿下？ お顔の色が優れませんが、お加減でもお悪いのですか？」

アンネゲルトの顔色が青くなつたのを見て、エンゲルブレクトがそう聞いてくる。まさか約束を破つたから後でくる説教が怖くて背筋が寒くなっている、とは言えなかつた。そんな子供のような事を知られるのは恥ずかしい。

「い、いえ、大丈夫です。……その、ちよつと故国が懐かしくて」

「先程の眩くらきは帝国の言語ではなかつたと思ひますが？」

そういえば、目の前の人物はオッターズシユタットでアンネゲルト達を助けてくれた時に、帝国の言語を使っていた。

アンネゲルトが異世界の国で育つたという事は、秘密でも何でも無い。異世界の国の言葉だ、と言つてしまつてもいいのだろうか。

ただ、いくら魔導に対する忌避感きひかんが薄れつつあるとはいえ、それと異世界は別ものではないのか。気味が悪いと思われたらどうしよう。

そう悩んで言い淀むアンネゲルトに助け船を出したのは、やはりティルラだった。

「アンナ様がお育ちになられた異世界の国の言葉ですよ」

あつさり言つたティルラに、誰よりもアンネゲルトが驚く。思わず隣に座る彼女の横顔を見つめてしまった。すると、ティルラは無言で小さく頷く。

一瞬その場がしんとしたが、すぐにエンゲルブレクトの雰囲気は柔らかくなつた。

「そうでしたか。異世界というと、噂うわさに聞く技術の発達した国でしょうか」

「え、ええ、そうなの。帝国はその異世界——日本から多くの物や技術を持ち込んでいます」

ほつとしたアンネゲルトは、日本と帝国の繋がりについていくつか話す。日本から持ち込んだ技術や、それに独自の改良を加えて帝国内に広めている事などだ。

エンゲルブレクトは真剣な様子で聞き入っていた。それに気をよくしたアンネゲルトが、つい熱弁を振るつてしまったのは仕方ない事だろう。

話が一区切りついた時、エンゲルブレクトは驚くような願いを口にした。

「なるほど……：妃殿下、出来ましたら私にもその故国の言葉をお教え願えないでしょうか？」

「え？」

アンネゲルトは固まつて目を泳がせる。まさかそんな反応が返ってくるとは思わなかつたのだ。

「優れた力を持つ国の言語ならば興味があります。無理でしょうか？」

「え、ええと……」

アンネゲルト達の周囲だけが、再び緊迫した空気を醸し出した。無理と言えば無理だし、出来ると言えば出来る。問題は教師役がない事だ。

話せる事と教えられる事は、似ているようでまるで違う。ただでさえ、日本語は世界的に見ても難解とされる言語なのだ。

ティルラなら出来るだろうが、彼女は仕事を立て込んでいて、そんな役目まで押しつけられない。

そのティルラはといえば、静かに事の成り行きを見ているようだ。いつもなら助けてくれるのに、とアンネゲルトは筋違いの恨みを持ちそうになる。

——あれ？ でも、べらべらになるまで面倒を見る必要はないのかな？

日本語を使う場面など、この国にいる限りそうあるとは思えない。ならば相手の気が済むように形だけさらっと教えて、お茶を濁じしてもいいのではないだろうか。

考え込むアンネゲルトに構わず、エンゲルブレクトはさらに言い募る。

「妃殿下のお育ちになった国の言葉でもあるのですから、ぜひ」

「へ？」

驚きすぎておかしな声が出してしまった。今の一言は、一体どういう意味で取ればいいのかのだろうか？

自分達を守るべき人の、育った国の言葉だから覚えようというのか。それとも。

——な、何だか変な意味に取れるんですけど!?

返答に苦しんでへどもどするアンネゲルトに、ティルラがようやく助け船を出す。

「教えるにしても、妃殿下がなさる訳ではありません。教師役は私になりますが、よろしいですか？」

「無論だ」

「それと、私は今多忙を極めています。手が空くまではお待ちいただく事になるかと」  
「それも承知した。では、よろしく頼む。妃殿下も、よろしく願います」

「え、ええ……」

結局押し切られてしまった。

——いいのかしら？ これで。

エンゲルブレクトとヨーンの二人には、既に船への出入りを許可してある。日本語の勉強の為に通う事に何の支障もない。ティルラがいいと言うのなら、いいだろう。

釈然としない思いを抱えたまま、その日の視察は終了となった。

王太子妃を船まで送り届けたエンゲルブレクトは、護衛隊の野営地へ戻っていた。

「どういう風の吹き回しですか？」

背後からヨーンに問いかけられる。何の事かと目線だけで聞けば、彼は無表情に近い顔で囁いた。

「妃殿下の故国の言葉についてです。何故あのような事を？」

部下達は少し離れたところをゆっくり進んでいる。エンゲルブレクトはそちらを一度見てから前を向いて答えた。

「何故も何も、我々は妃殿下の為の部隊だからな。より妃殿下の近くに在る為に、言葉を覚えるのはいい手だと思っただが？」

「本当にそれだけで？」

優秀すぎる奴はこういう時に困る。苦笑したエンゲルブレクトはそれ以上何も言わなかった。ヨーンも聞こうとはしない。全ては宿命としている狩猟館に戻ってからだ。

船と野営地はそう離れていない。ティルラからの要望で船から見えづらい場所だが、

何かあった時にはすぐに駆けつけられる距離だ。もともと、あの船にいる限りは王太子妃は安全だろう。

一度入っただけだが、あの船の中で迷わず王太子妃のもとへとどり着くのは、相当苦労するはずだ。

階数の多さ、内部の広さ、複雑さ。どれをとっても、そこらの館や城など目ではない。船そのものが迷宮に思えた。

移動手段もそうだ。あの動く箱、エレベーターは知らない者にとっては用途すらわからないだろう。実際、エンゲルブレクト達も最初はわからなかった。あれがあるせいか、階段はひどくわかりづらい場所に設置されており、それも移動を困難にさせている。

また、帝国から同行してきた護衛船団の存在があった。護衛船の中身も同様なのかはわからないが、王太子妃の乗る船があれなのだ。それを護衛する船にも魔導技術が使われていないはずがない。

エンゲルブレクト達護衛隊が真価を發揮出来るのは、おそらくアンネゲルトが社交界に出るようになってからだ。王都に出れば、船の中と同様という訳にはいかない。

やがて、無言のまま野営地に到着した。馬は厩舎の当番に任せ、エンゲルブレクトとヨーンは狩猟館に入る。他の者達は野営組だ。

執務室に戻ると、ヨーンが物問いたげにこちらを見る。そんなにおかしな行動だったのだろうか、とエンゲルブレクトは苦笑した。

「そう呪むな」

「呪んではいません」

「そんなに訳が知りたいのか？」

「無論です」

「額面通りに言葉を覚えたい、とは思わないのか？」

「隊長が私の立場なら、そう思われますか？」

質問で返され、エンゲルブレクトは首を横に振る。思う訳がない。

「妃殿下が何をお考えか、わかるか？」

「ここしばらくの視察の事ですか？」

遠回しな言葉だったが、ヨーンにはしっかりと通じた。こういったところが得がたい男なのだ。

「そうだ」

エンゲルブレクトは執務用の机の椅子に座り、ヨーンにも座るように目線で示した。

彼が手近な椅子を引っ張ってきて腰を下ろすのを見てから、エンゲルブレクトは話を再

開する。

「これまでほとんど船から下りなかった妃殿下が、ここ数日は随分行動的だ。しかも我々護衛隊を伴っている」

「船に乗っているのに飽きたのでは？」

「それなら、わざわざ護衛隊の人員をとつかえひつかえする必要はないだろう？ 同じ人間が護衛につかないように配慮しているようではないか」

アンゲルト側からは、同じ隊員を同行しないようにと通達されていた。理由は隊員の顔を覚える為というものだ。

その理由自体はさして首を傾げるものではない。いざという時、顔のわからない護衛など危なくて使えたものではないからだ。きちんと「味方」なのだ、王太子妃側に認識してもらおうのはこちらとしても大事な事だった。だが――

「何故わざわざこんな面倒な手を使う？ まるで護衛隊の人員全員を、一度は視察に連れ出そうとしているようだぞ」

単純に顔を覚えるだけなら、一堂に集めて並べさせればいい。何もこんな手の込んだ事をする必要はない。

本当に、顔を覚える事が目的なのか。彼の疑惑はその一点にあった。他に目的がある

のではないか、あるとしたらそれは何なのか、帝国に利してスイーオネースには不利になる事ではないのか。

そう考える一方で、あの素直すぎるくらい素直な王太子妃が、そんな真似をするだろうかという思いもあった。彼女が、宮廷の老獪な政治家達と同じような事を考えつくなどあり得るのか。

信じたい気持ち半分、疑う気持ち半分というところだ。エンゲルブレクトにとって、王太子妃は護衛対象だが、彼女が国にとって害悪となるようななら見過ごす訳にはいかない。

「それと、言葉を覚える事との繋がりは？」

「言葉を習う目的で船に頻繁に出入りしていれば、妃殿下の目的を探る事が出来る。それと妃殿下が侍女と会話をしている際、時折聞いた事のない言葉を使っているのを知っていたか？」

「そういえば……」

言われて思い出したのか、ヨーンは軽く頷く。アンネゲルト本人が自覚しているかどうかは知らないが、例の言語を使って話している場面は多かった。

「言葉がわかれば二人が何を話しているのかがわかる、という事ですか」

「そうだ。それに」

「それに？」

首を傾げるヨーンに、エンゲルブレクトはにやりと笑った。

「この国で他に知っている人間が少ないという事は、誰かに聞かれた時にその内容を知られずに済むだろう？」

一石二鳥という訳だ。彼のこの一言で、ヨーンも言語習得に参加させられるのが決定した。

「それにしても、あのような言い方をしなくてもよろしかったのでは？」

「何かまずかったか？」

「側で聞いていて、隊長が妃殿下を口説いているのかと思いました」

率直すぎる副官の言葉に、エンゲルブレクトは眉間に皺を寄せる。

「人聞きの悪い事を言うな。真摯に教えを請うたまでだ」

「そうですね……まあ、妃殿下は赤くなるどころか、青ざめていらっしやいましたしね」  
 つい気が急いで自制するのを忘れていたが、彼女は普通の女性だ。軍で鍛えたエンゲルブレクトが気迫を込めれば、怯えられるのも当然だろう。

「とにかく、しばらくは言葉を覚えるという大義名分があるから、船にも行きやすくな

る。護衛するにもやはり側そばにいらなくてはな

そのついでに、何の為の視察だったのかを調べればいい。

「忙しくなりますね」

「そうだな。望むところだ」

この執務室で書類と睨にらめっこしているより、遙はるかにやる気が出てくる。エンゲルブレクトは窓から見える離宮の壁に目をやりながら、今後の事に思いをはせた。



離宮改造が本格的に始動してからそんなに経っていないある日、イエシカとリリーは揃ってアンネゲルトの前にいた。

「……一体どうしたの？ イエシカ。そのやつれようは」

一目でげっそりしているのがわかる状態だ。髪の毛の艶つやはなく、目の下にははつきりと隈くまがある。

「リリーに魔導器具の講義をしてもらっていたんだが、如何いかんせん進め方が早くてな……」  
勉強疲れのようだ。しかも分野外の魔導に関する事である。魔導については偏見があ

るこの国だ。そこで生まれ育ったイエシカでは、基礎の基礎すら知らなくてもおかしくない。

リリーも疲労の色が見えるのだが、彼女の方はそれを上回る嬉しさで一杯といった感じだ。ハイ状態とでも言えはいいのか。

「イエシカさんは覚えが早くて、教え甲斐ががあります！」

リリーの満面の笑みの裏には、イエシカの苦労があるらしい。

「リリー、お手柔らかにね」

イエシカが気の毒になって、そんな言葉をかけるアンネゲルトだった。

帝国では学校に行っていない家の子供でも、魔導の基礎程度は知っている。知らなければ魔導器具を使う事が出来ないのです、どんなに末端の村でも教えるようにしてあるのだ。

無論、専門に教えている学校もある。魔導に関する学校を持っている国は、西域の中  
では帝国とその隣国のイヴレーアだけだそうだ。

中にはスイーオネースのように、魔導を忌避きひする教会の権力が強くて、魔導に関するもの全てが迫害される国もある。帝国の皇后の出身国ロンゴバルドがそうだ。魔導に関する者は処罰されていた歴史があり、今でも魔導について口にする事すら憚はばられている

のだという。

その点、スイーオネースはまだ緩い方だろう。魔導を研究していたフィリップが追放を食らった程度だ。それも、おそらくは見せしめの意味合いが強い。事実、彼以外に研究に関わっていた人間が王都から追放されたという話は聞いた事がなかった。

そのスイーオネースは魔導先進国である帝国と同盟を結び、魔導の技術供与を受ける事を望んでいる。国が大きく変わろうとしている証拠だった。

アンネゲルトがそんな事を考えていると、イエシカが何やら取り出した。

「まずはこちらを見てくれ」

そう言うて差し出されたのは巨大な紙だった。カールシユテイン島の地図のようだ。

その地図には離宮と狩猟館、庭園の様子が細かに描き込まれている。

ポロポロ状態のイエシカだが、何も魔導の勉強だけをしていたのではないようだ。

「これは？」

「現在のこの島の様子だ」

首を傾げるアンネゲルトに、イエシカは簡単に答える。彼女はさらに大きめの紙を数枚出してきた。

「そして、こちらが島に手を入れる為の案だ」

紙には、離宮の庭園や狩猟用の森に作る噴水、人工湖、人工水路などが詳細に描き出されている。先程の地図と突き合わせると、かなり手を入れる予定だと見て取れた。まさしく改造である。

「この島は水源が地下にあるんだ。生活用水はそこから引くとして、こちらの人工湖や水路の水源は海水でも構わないかと思っていたんだが……」

過去形である。イエシカはちらりとリリーを見やると、リリーが言葉が続ける。

「せっかく水源があるので、地下からくみ上げる事にしました」

「という訳で、淡水での人工湖及び噴水、水路のめどが立った」  
水路はまだしも、人工湖となればそれなりの水量が必要になる。地下からくみ上げるにしても、魔導器具を使わなくては難しいだろう。

「そうまでして湖や水路を作る必要があるの？」

「水は大事だろうが。景観をよくする事にも役立つし、何より動植物を育てる」

イエシカの言葉に、アンネゲルトも納得する。考えてみれば、改造後の離宮ではこれまで以上に水の使用量が増えるはずだ。

イエシカによれば、既に森には自然の泉がいくつか存在するらしい。この際に、それらを水源として一括管理するという。



「森の方にも手を入れる事になるな。次はこっちだ」  
 イエシカは次の紙を引っ張り出した。

「これは庭園の造園計画。今ある庭園は古いから、一から造園し直すぞ」

紙には、区分けされた庭園の設計図が描き込まれている。現在の庭園は離宮の玄関側に花壇、その奥に植え込み、離宮を背にした左側に生け垣の迷路、右側に狩猟用の森が広がっている状態だ。

新しい造園計画は、花壇を作り替えて植え込みをなくし、水路をこちらにも作って人工の滝を作るといふものだ。イエシカは図で示しながら細かく説明していく。

「植え込みがここまで広がっているので、これは全部取り払う。景観が悪いし防犯の為にもならない。花壇そのものは残すが形は変える。それと、庭全体に段差を作って景観に変化をつける。人工の滝は自然の傾斜を利用するものだ」

次々と告げられる情報に、アンネゲルトはついていくのがやっとだった。

庭園には他にも遊歩道と水路、噴水、池などが整備されるといふ。

「この辺りは、リリーとティルラから知恵を拝借したんだ」

噴水と水路、人工湖の提案はリリーから、森に遊歩道を作るといふ提案はティルラからだそうだ。

「森の中の見通しを、幾分よくしておいた方がいいかと思ひまして」

ティルラがそう補足をする。

景観などの面からの発言ではなかったらしい。だが、そうすると狩猟用としては成り立たなくなる。見通しのいい森に獲物は住まないだろう。

そう言うと、ティルラは別に構わないのでは、と答えた。

「元は狩猟用だったとはいえ、アンナ様は狩りをなさらないでしよう？」

これには素直に頷く。狩猟は貴族の嗜みで、女性も見物する事があるが、アンネゲルトは嫌いだ。楽しむ為だけに動物を殺す狩りに、意味を見いだせないのだ。

それに、とティルラは続ける。

「あれだけの森を放っておくのはもったいないかと思つたんです」

しばらく視察と称して島内を巡っていたが、当然森もその対象だった。その際、森でのピクニックをアンネゲルトが楽しんだので、どうせなら遊歩道を作って歩きやすくしてはどうかと考えたそう。間伐も行い見通しをよくすれば、防犯にも繋がる。森の中の遊歩道は森林浴にもぴったりだ。

その話を聞きながら計画図を覗き込んだアンネゲルトは、ぽつりと漏らした。

「いっそ、フィールドアスレチックを作ってもいいんじゃないかしら」

「ふいーるどあすれちつく?」

イエシカに首を傾げられて、アンネゲルトは説明する。フィールドアスレチックとは、森林などの中に木で作った遊具を置き、それらを使って体力作りを行う事だ。名称そのものは和製の造語だそうだが、どのみちこちらで通じる言葉ではないので、その辺りは割愛<sup>かわあい</sup>している。

「そんなものを作ってどうするんだ?」

「どうするって、もちろん体力作りの為に使用するのよ?」

船の中にも多くのアクティビティが存在するが、そろそろ新しい物が欲しい。その為の提案だ。

イエシカはアンネゲルトの言葉に再び小首を傾げていた。

「体力作り? 誰が使うんだ?」

「私とか、ティルラとか……他にも希望者がいれば、使えるようにしてもいいんじゃないかしら」

難易度を上げれば、護衛隊や帝国からついでにきた護衛船団の兵士達の訓練にも使えるんじゃないだろうか。後で相談してみよう。

「とりあえず、庭園の方はこんな感じだな」

そう言うと、イエシカは軽く溜息を吐き、広げた紙を全て丸めて一歩下がった。すると、リリーが前に出る。

「では、今度は私から。以前依頼されました空間での個人認証ですが、おおよその形がまとまりました」

「本当!?!」

「はい」

通過する人間を識別するゲート状の物を設置し、許可を与えられた人間以外にはトランプを発動する。そういう仕掛けを作れないか、アンネゲルトが頼んでいたものだ。

このシステムが構築出来れば、離宮改造に面白い仕掛けを<sup>ほどこ</sup>施せる。

「その後ティルラ様とも話し合いました、いっそ島全体に仕掛けるセキュリティシステムにしてはどうかと」

「島全体……」

二人の会話を聞いているイエシカは、既についていけないようだった。とはいえ、ここでわからなくとも後でリリーが懇切丁寧に教えるだろうから、問題はない。

「島に上陸する時点で識別を行い、島内にいる間の居場所把握に役立てようかと思えます。また、そこから誰がどの場所を通ったかのデータも取れば、警備以外にも役立て